

CONTENTS

〈巻頭言〉社会変化と危機管理	中村 雅秀 ……1	監査法人の独立性と コンサルティング業務	千代田邦夫 ……7
著作権保護と新・セコハン市場	大川 隆夫 ……2	会計ビッグバンで不況は深刻化?	松村 勝弘 ……8
地球環境問題と貿易政策 —所有権と環境政策	谷垣 和則 ……3	国際シンポジウム「確率過程論と 数理ファイナンスへの応用」	赤堀 次郎 ……9
カネカソーラテックに 太陽電池製造工場を見学	吉田 要 ……4	大学に求められる起業支援活動の展開	服部 吉伸 ……10
非営利組織の論点	池田 伸 ……5	数理ファイナンスは役に立ちますか?	原 啓介 ……11
国有企業の民営化	長島 修 ……6		

巻頭言

立命館大学 社会システム研究所
所長 中村 雅秀

社会変化と危機管理

市場経済の発展が社会的退廃を伴うのは、理の必然である。かつて公営競馬の廃止を求める議会質問に、「資本主義そのものがバクチである」と答弁して有名を馳せた知事がいた。人口の数より氾濫する銃の数の多いアメリカに生活して幾つかの強烈な印象を受けた。心ある青年がヨーロッパへ流出するほどの社会的退廃、広大な大陸国家・連邦制国家を物理的・心理的に一体化する社会的資産としての高速道路網と軍事力、「絶対地代ゼロの国」の人種差別、等々。

普通のアメリカ人なら決して出入りしない街や通りに入って殺された観光客や留学生、年々10万人にも上る幼児誘拐、東洋系赤子（特に日本人）の蒙古斑に非虐待証明が得られない限り権力的に引き離される親子等々、社会の退廃を示す出来事は枚挙にいとまがない。所得格差の拡大や人種差別などの結果である。しかしかの国では、退廃が進むほどこれを排除するための権力が強化される。「武装」して一般市民を襲う日本の「暴走族」など州兵が出動して鎮圧するだろう。それが社会のバランスを維持するシステムになっている。もっとも権力の強化は新たな退廃を生む土俵にもなるが。

ひるがえってわが日本では、戦後改革の過程で旧社会システムが大きく破壊される一方、「日本的官僚システム」（「民」のシステムにおいても）、共同体的社会関係が維持され、憲法的法的規範との間に細筋が生じ（個別法の多くが「戦前」を引き継いだ）、いわば社会生活にニューディールの社会規範が導入されることはなかった。戦後復興以来の「経済犯罪は犯罪に値せず」「疑わ

しきは罰せずは権力関係にも妥当する」といった、退廃を「是」とする価値観はこうした歴史的産物であった。グローバルイゼーションととりわけ青年の価値観が多様化する中で、こうした戦後のシステムが今日大きくその変更を迫られている。時に見られる政官財癒着システムの摘発も構造改革論議もそうした産物だろう。しかし、戦後体制の遺産に対する社会的マクロ調整に見える施策の多くが、実はミクロなアジェンダ対応策にすぎないことが見逃されてはならない。経済構造改革は「不良債権の処理」であり、行政改革は「政府負担の軽減」にすぎず、商法改正は「腐敗の予防的防止策」にすぎない。ロステンコフスキー（Mr.ジャパン・パッシングと呼ばれた下院予算委員長）がわずかの選挙資金の流用で政界から追放され、業務上背任の罪で生涯を塙の中で過ごすほどの経営者責任を問われるかの国とは依然あまりの距離感である。なぜ、「法の下に不平等」の典型＝駐車違反の「非取り締まりの取り締まり」の民営化を実行しないのか。それはやはり「車道利島国日本高速道路列島」の利害＝「聖域」を守り取るためなのだろうか。

実は、良きにつけ悪きにつけこうした変化をもっとも敏感に感じ取っているのは青年層である。大学にあっては教学システムはもちろん、青年の価値観の変化、家庭環境を含む生活感覚の変化、文化意識・性意識や国際感覚の違いなど、そのありかたについてもっと大胆かつ破壊的に長く提ってきたシステムの有効性を問い直すことが必要ではないだろうか。それが、35年前＝大学紛争の教訓ではなかったか。